

アニメで知る心の世界

こもれび心の診療所 羅田 享

今回扱うアニメ作品：ひゃくえむ

10 回目

今回のテーマ

I. スポーツアニメの変遷とひゃくえむ

II. 子ども時代のトガシと小宮の交流について考える

III. 高校時代のトガシと小宮について考える

I. スポーツアニメの変遷とひゃくえむ

これまでのスポーツアニメと「ひゃくえむ」が異なる点は、100m 走という競技を通じて「なぜ走るのか」「なぜ生きるのか」という実存的な問いに踏み込む作品であるということである。この作品は父性の導きも母性的な抱えもない裸の個として、生きることの意味をどう掴み取るのかが問われている。

Ⅱ. 子ども時代のトガシと小宮の交流について考える

Ⅲ. 高校時代のトガシと小宮について考える

子ども時代、トガシと小宮は走ることを通じてきょうだいとなり、互いの存在によって走るものの質が変わり始めた。しかし小宮の突然の転校により、きょうだい葛藤に向き合う機会すらないまま関係は断ち切れ、それぞれに処理されなかった喪失が残った。

高校時代、トガシは浅草葵の抱えのもとで潜在空間を形成し、走ることが無心に没頭できる「遊び」となり、走る意味を見出し、再び速くなっていく。一方の小宮は財津に新たな父性的対象を見出し記録を伸ばし、速くなっていくが、潜在空間を持たないまま自己愛的な殻に閉じこもり孤立を深めた。インターハイの決勝、雨の中で再会した二人。トガシは小宮に敗れるが、小宮が告げたのは「走り方、変わったね」という失望の言葉であった。潜在空間の中で走ることを覚えたトガシは、小宮が追い求めていた「あのトガシ」ではなくなっていた。小宮にとってトガシに勝ったということは空虚であり、「100mを誰よりも速く走れば全部解決する」というテーゼが揺らぎ始める。そのテーゼが揺らいだのはトガシも同様であった。二人とも解決しない思いを抱えながらも陸上を続け、10年が経過していく。

Ⅳ. 現実逃避と潜在空間——あれから 10 年

オデッセイ世代（新成人期）とは

オデッセイ世代とは、主に 21 歳から 30 歳にかけての発達段階を指す。「オデッセイ」とは古代ギリシャの叙事詩『オデュッセイア』に由来し、英雄オデュッセウスの 10 年間に及ぶ冒険の旅から、「放浪と冒険の長い旅」を意味する。発達心理学的に重要なのは「再中心化」のプロセスであり、青年期の成功体験が成人世界で通用しないことへの挫折と幻滅を経て、自分を再定義していく。単なる迷走ではなく、成人社会に適応するために

不可欠な発達課題である。

トガシの「あれから 10 年」はこの観点から読み解ける。インターハイで小宮に敗れた体験を引きずるように実業団に所属し続けるが、成績は振るわない。本来この時期は創造的なさまよいの時間であるはずだが、トガシのさまよいには探求も期待もない。後輩の樺木に「変わった」と告げられ——かつて小宮が失望を込めて言ったのと同じ言葉の反復——トガシの中に埋もれていた何かに火がつくが、次の大会でも振るわず、変化を求めて海堂に会いに行く。

海堂は 15 年間、財津の二番手に甘んじてきた。しかし「次こそ自分が勝つと信じきれている」と言い、その理由をこう語る。「現実逃避は、俺自身への期待だ。俺を俺が諦めていないという姿勢だ」。この言葉はウィニコットの潜在空間の体験を言語化したものである。現実を否認するのでもなく、現実屈服するのでもない。現実を知り尽くした上で、現実と空想の間にある第三の領域で創造的に生きるということ。トガシにとって、かつて葵に抱えられる中で感覚として掴んだ潜在空間の体験が、初めて言葉を与えられた瞬間であった。

しかし海堂はトガシに警告もしていた。「現実を目を塞いで立ち止まると、目を見開いて逃げるのとは大きく違う」。トガシが森川の憧れに触れ「誰かのために走る」という理由を得たとき、海堂はそこに危うさを見抜いていた。走る意味を自分の外側に置けば、その「誰か」がいなくなれば意味も消える。前回の番組で取り上げた「竜とそばかすの姫」のすずが、仮想世界 U の中で創造的に活動しながらも現実との接点を断たなかったように、潜在空間は現実と空想の「間」にあるからこそ成長が起きる。翻って高校時代のトガシは葵に抱えられ潜在空間を形成したが、インターハイでの敗北という現実を受け入れられず「目を塞いで」しまった。現実を直視するという条件を満たせなかったことが、10 年間の停滞へと繋がっていったのである。

そして海堂の警告は的中する。樺木とほぼ同タイムの 2 位で標準記録 B を突破し、日本選手権への参加資格を得るものの、直後に肉離れを起こしてしまう。走ることが困難になり、日本選手権の参加を断念しようとする、マネージャーから引退ならびにコーチ就任を打診される。走ること自体を奪われたとき、「誰かのために走る」という外部に置いた意味は機能しなくなるのである。

そして海堂の警告は的中する。樺木とほぼ同タイムの 2 位で標準記録 B を突破し、日本選

手権への参加資格を得るものの、直後に肉離れを起こしてしまう。走ることが困難になり、日本選手権の参加を断念しようとする、マネージャーから引退ならびにコーチ就任を打診される。走ること自体を奪われたとき、「誰かのために走る」という外部に置いた意味は機能しなくなるのである。

途方に暮れたトガシは、夕暮れの公園のベンチに座っていた。そこでリレーの練習をしていた二人の学童にアドバイスを送る。

「全力で負けたって、負けることもある。でも落ち込むことじゃない。命を取られるわけじゃないし、"負けたっていい"ぐらいの気持ちのほうが、ショックも少ないし、むしろいいパフォーマンスができる時だってある。速さだけがすべてじゃない。気楽でいいんだよ。人生なんて賭けなくたって……」

そう言いながらトガシは小学生の前で号泣し、泣き崩れる。

「負けたっていい」「速さだけがすべてじゃない」「人生なんて賭けなくていい」。一見すると達観した大人の助言に聞こえるこの言葉は、まさに海堂が警告した「現実を目を塞いで立ち止まる」姿そのものである。現実を直視できず、走れなくなった自分の痛みから目を背け、「たいしたことじゃない」と自分に言い聞かせている。かつて子ども時代に小宮に「それを決めるのは君だよ」と成長への選択を迫った父性の導きとは正反対の言葉が、ここでは語られている。潜在空間は完全に崩壊し、遊びの質も本気の感覚も失われている。

しかしトガシの涙がすべてを裏切っている。「気楽でいい」「賭けなくていい」と言いながら、トガシ自身はそれを一ミリも受け入れられていない。走ることが自分にとってどれほど大切であったか、走れなくなることがどれほどの喪失であるか。言葉で覆い隠そうとしたものが涙として溢れ出てしまう。あの涙は、トガシの中にまだ「本気」が死んでいないことの証でもある。

5) あの一瞬のために——仁神との対話

肉離れの治療のため仁神の医院を訪れたトガシは、その帰り、仁神の運転する車の中で言葉を交わす。

仁神：「それにしても1週間後か」

トガシ：「あと三本、100メートルを全力で走ればいいんです」

仁神：「高校の頃の自分を思い出すよ。震える程怖いのに、あの一瞬……ごくわずかなあの一瞬のためなら、人生を棒にふると思える」

トガシ：「俺は、いつの間にか、明日生きるために死んでました。次のレースは俺の25年。そして今、昨日までの続きを、この先も生きるくらいなら、今、全力で走れなくなります」

仁神の「あの一瞬のためなら人生を棒にふる」という言葉は、かつてエディプスコンプレックスに押し潰され、走ることをやめた青年が辿り着いた境地である。父の法の重圧から解放され、潜在空間の中で走る喜びを知った仁神だからこそ語れる言葉であろう。

そしてトガシの「明日生きるために死んでました」という言葉は、自らの10年間を凝縮した痛切な自覚である。走る意味を見失い、成熟を装った諦めの中で、生きているようで生きていなかった。それは海堂が警告した「目を塞いで立ち止まっている」状態そのものであった。しかし今、走れなくなるかもしれないという現実と直面し、トガシは初めて目を見開く。「昨日までの続きをこの先も生きるくらいなら、今、全力で走れなくなります」。これは現実を直視した上での決断であり、海堂の言う「目を見開いて逃げる」現実逃避の始まりである。

V. ガチになること——極上の10秒

1) 財津と小宮の再会——世代交代と遺された言葉

日本選手権の会場で、小宮は財津と再会する。高校時代、小宮にとって財津は理想化された父性的対象であった。「不安とは君自身が君を試す時の感情だ」という言葉で高校時代の小宮を鼓舞し、古傷のトラウマを克服する契機を与えた人物である。

しかしこの場面での二人の力関係は、もはやかつてのそれではない。予選を流して余裕の1着で通過する小宮に対し、財津は「不安への対処などメンタルケアなどと言っていた頃が懐かしいね」と微笑む。かつて導く側にいた父性的対象が、導かれた子の成長を認め、自らの退場を予感している姿がそこにある。これはエディプス的な父親殺しの構図であり、世代交代の象徴とも言える。

しかし財津はただ退場するのではなく（ここではまだ負けておらず、退場していないが）、小宮にある真実を伝えようとする。小宮が「確率と計算、傾向と対策、その先にある偉大な記録」を目標として掲げたとき、財津はそれを「称賛」ではなく「哀れみ」だと告げた。そして絶対王者として君臨してきた自らの体験を語る。「加速すればするほどみ

んなが離れていく。横をみても誰もいない。そこから見える景色は最下位のそれと同じだ」と。記録を追い求め、頂点に立った者だけが知る孤独。そしてその孤独の中で財津が辿り着いた真実が、「本当の勝利、歓喜を与えてくれるのは、記録でもメダルでもない。対戦相手だけだ。誰かと勝ち取って競った一位、それこそ」という言葉であった。

この言葉は、100m 走という競技の本質に触れている。100m 走は横一線に並び、一斉にスタートする。対等な地点から走り出し、互いの速さが否応なく露わになる中で切磋琢磨していく。そこにはまさに母の法のもとでのきょうだい関係の構造がある。財津が語っているのは、対等な者同士が共に走り、競い合うからこそ生まれる歓喜のことであり、それはきょうだいトラウマを引き受けることの中にこそ真の喜びがあるということに他ならない。記録という数字の世界に閉じこもり、他者のいない孤独の中で走ることは、きょうだいトラウマを回避した走りであり、そこには走る歓喜が生まれない。

財津のこの言葉は、殺されゆく父が最後に遺す遺言のようなものである。自らが乗り越えられていくことを受け入れた上で、絶対王者としての孤独の中で知り得た真実を次の世代に手渡そうとしている。

しかし小宮はこの言葉を受け取ることができない。「僕には僕のやり方があります」。二人の会話は交わることなく、平行線のまま終わる。小宮がこの言葉を受け取れないのは、これまでの歩みを考えれば必然であったとも言える。子ども時代からひとりぼっち、孤独の中で走り、トガシという理想化された対象（それは財津に置き換えられていったが、理想化という面では変わらない）に追いつき追い越すという垂直的な目標の中で自らを鍛え、高校時代には記録と計算の中に閉じこもっていった小宮にとって、「対戦相手こそが歓喜を与える」という水平的な真実は、知識としては理解できても、体験として腑に落ちるものではなかったのではないだろうか。

そして準決勝で準決勝には財津、小宮、そして海堂が同じ組に揃い戦うのである。

2) 準決勝——海堂の到達と小宮の衝撃

準決勝には財津、小宮、そして海堂が同じ組に揃った。実質的な決勝と言ってよい顔ぶれであった。周囲の注目は絶対王者・財津と、その王座を脅かす新鋭・小宮に集中しており、15年にわたり万年2位に甘んじてきた海堂は蚊帳の外に置かれていた。

しかし1着でゴールラインを駆け抜けたのは海堂であった。しかも日本歴代2位という驚異的な記録とともに。

この結果は、財津が小宮に遺した言葉の正しさを、走りそのもので証明するものであった。海堂は記録を目標に走ってきたのではない。15年間、財津という対戦相手の横で走り

続けてきたのである。「不思議なことに、今の俺は、次こそ自分が勝つと信じきれている」と語り、「現実逃避は俺自身への期待だ」と言い切った海堂の走りは、まさに財津が言う「誰かと勝ち取って競った一位」そのものであった。勝てない現実を知り尽くしながらも、対等な相手と共に走り続ける中で潜在空間を生き続けた海堂は、記録を目指したのではなく、走り続けることの中で記録に到達したのである。

小宮はこの大会で確かに財津に勝った。エディプス的な父親殺しは成就した。しかし小宮が人生のすべてを賭けて追い求めてきた「偉大な記録」は、自らの手ではなく、海堂という——小宮から見れば執念だけの人間に——奪い取られた。「確率と計算、傾向と対策、その先にある偉大な記録」という小宮の方法論が、記録ではなく対戦相手と走り続けることの中で鍛え抜かれた海堂の走りに凌駕されたのである。

小宮にとってこの衝撃は、単なるレース結果以上の意味を持っていたのではないだろうか。財津が「哀れみだよ」と言い、「横をみても誰もいない。そこから見える景色は最下位のそれと同じだ」と語った言葉。あの時受け取ることのできなかった真実が、準決勝の結果として目の前に突きつけられたのである。海堂が15年間の万年2位の中で培ったもの——走り続けることの意味、対等な相手と共にあることの歓喜——それは、孤独の中で記録と計算に閉じこもってきた小宮には、理解の及ばない世界であったと考えられる。

父性的対象である財津を倒し、しかしきょうだいとして共に走ることを意味を持たぬまま、小宮は決勝へと向かう。そこで小宮が会うのが、トガシであった。